

# 津波資料として読み解く「輪島町絵図」——津波の記録と記憶をめぐって——

泉 雅博

はじめに

石川県輪島市鳳至町に鎮座する住吉神社に、一舗の絵図が伝わっている。『能登輪島住吉神社文書目録』で「輪島町絵図」と題される、竪一四六・二センチメートル、横一五六・四センチメートルに及ぶ大絵図である。<sup>①</sup> 当目録解題では、「輪島町絵図（中略）は、宝暦以降の作と考えられ、色分けで、鳳至町、海士町、輪島崎町の百姓・頭振名の入った屋敷地が示され、河井町も本町通り、浜通りから重蔵宮に至る部分の家名が記され市街図として貴重なものである」と、その資料価値を高く評価している。<sup>②</sup> ただ作成年代が「宝暦以降の作と考えられ」と記されるように明確になっていないためか、これまで歴史資料とし

ての利用は限定的であつたと言わざるを得ない。実際、『輪島市史』通史編の近世に、「輪島町絵図」への言及はみられない。<sup>③</sup> 一方、『図説 輪島の歴史』では、「近世輪島町の成り立ち」「輪島町の町政」「能登一番の輪島大橋」で「輪島町絵図」は引用されているものの、町や大橋の概観を示すにとどまっている。<sup>④</sup>

「輪島町絵図」の歴史資料としての利用は、このように決して活発なものではないが、他方でこの絵図を積極的に活用した研究会が存在する。それは、地震の研究者を中心とする「古地震研究会」である。<sup>⑤</sup> その研究成果は萩原尊禮編著『続古地震——実像と虚像』<sup>⑥</sup> に収録されており、第Ⅱ部各論第9章「天保四年（一八三三）の庄内沖地震——埋もれていた史料に基づく新地震像」と、第Ⅲ部史料編五「天保四年（一八三三）の庄内沖地震」としてまとめられている。天保四年十月二十六日、庄内沖

を震源とする地震が発生した。この地震は津波も引き起こし、庄内地域を中心として北東日本海海域の広範囲にわたり大きな被害をもたらした。輪島では地震動による被害はなかった模様であるが、押し寄せた津波によって甚大な被害が発生した。古地震研究会では「輪島町絵図」を活用し津波被害の状況を図示するとともに、絵図の作成年代についても、その下限を地震以前とする見解を導き出した。

本稿は、この古地震研究会によって地震資料として活用された「輪島町絵図」を、改めていま一度検討し、地震に直接的に関わる資料として位置づけ直すことを試みるものである。言い換えるなら、それは「輪島町絵図」が、天保四年の津波被害に直接的に関わって作成されたものではないかという可能性の究明である。

二〇一一年三月十一日、東北地方太平洋沖地震によって東日本大震災が起こった。地震は大地を揺るがすとともに津波を引き起こし、福島第一原発では炉心溶融という深刻な事故までが発生、まるで神話の出来事のような巨大な惨事を目の当たりにすることになった。もとより、この災害は歴史学関係者にも大きな衝撃を与えるものであった。例えば、日本の歴史学界を代

表する機関の一つ歴史学研究会では、東日本大震災の衝撃を二つの問題に集約して受けとめている。<sup>7)</sup>一つは、これまでの歴史学がもつばら「人間社会の発展史」を関心の対象にしていたこと、しかもその人間社会は「自己完結的な存在」であるかのよう錯覚されていたことに対する問題性の指摘である。東日本大震災のような「人間社会を大きく変容させる自然災害、自然現象」を、いかにして歴史に組み込んでいくかの問いが疎かにされてきたことに対する強い反省がそこには存在する。二つめは、「科学技術に対する過信」である。核兵器による悲劇を日本人ほど熟知する国民はいないはずなのに、原子力エネルギーの危険性に警鐘を鳴らすことに十分ではなかったこと、いやそれどころか戦後日本では、原子力は明るい未来を象徴する科学技術としてさえ捉えられてきたことに対する深い悔悟である。そのうえで、「三・一一」の衝撃のもとで明らかになったこの二つの問題は、「過去に学び、未来を展望する科学としての歴史学の存在意義を根底から揺さぶるもの」と、危機感をあらわにしている。

本稿もまた、歴史学研究会が抱いた危機感を共有するものである。<sup>8)</sup>三・一一以後、これまでと同じ眼で史資料を見ることが

できなくなったことも事実である。まずは「隗より始めよ」の言葉ではないが、「輪島町絵図」を津波の記録と記憶をめぐる資料として読み解く試みのなかから、「自然と人間社会」のあり様を考えていく手掛かりを得たいと念じる。

## 一 描かれた輪島

「輪島町絵図」に描かれる輪島町は能登国鳳至郡にあり、能登半島の奥深くから流れ出る鳳至川と河原田川が合流し、輪島川と呼び名を変えて日本海にそそぐ河口の両岸に立地する。日本海に面した右岸には河井町、左岸には鳳至町があり、鳳至町に続いて海士町と輪島崎村が海沿いに開けている。輪島町は、この地域的なまとまりを有する四か所の、地元における一般的な呼び名である。このような「輪島四か所」という町の捉え方は、絵図の描かれた近世に始まるという。ただ近世の輪島町は、その繁栄ぶりから「国府同事の処」と称されながらも、行政単位上は「町」ではなく「村」であった。したがって、住民の身分も「町人」ではなく「百姓」と「頭振」であり、しかも頭振が圧倒的な多数を占めていたが、それは住民の暮らしが貧し

かったからではなく、輪島の実態が町場で住民のほとんどが農業以外の生業・諸稼ぎで暮らしを立てていた結果にほかならなかった。<sup>1)</sup>加賀藩は、このような町場でありながら行政上は村とされている場所を、「町立」あるいは「宿立」として一応は区別をしていた。<sup>2)</sup>輪島は近世には町立の村として、また遡れば古代以来、奥能登の政治・経済・文化の一中心地としての歴史を重ね今日にいたった町である。

その輪島町を描く「輪島町絵図」を撮影したものが写真一である。写真一―一は全体図、写真一―二は河井町の部分、写真一―三は鳳至町・海士町・輪島崎村の部分である。ただし絵図は大きなものであるため、部分写真でも文字を始めとする情報が読み取りにくいので、ここでは絵図をトレースし、くずし字で書かれた文字については楷書体で改めたものを図一として掲載しておく。図一―一は河井町の部分であり、図一―二は河井町の西側、図一―三は河井町の東側である。また、図一―四は鳳至町・海士町・輪島崎村の部分で、図一―五は鳳至町の南側、図一―六は鳳至町の北側、図一―七は海士町、図一―八は輪島崎村を中心としたものである。

前述のように、「輪島町絵図」は「宝暦以降の作」と推測さ

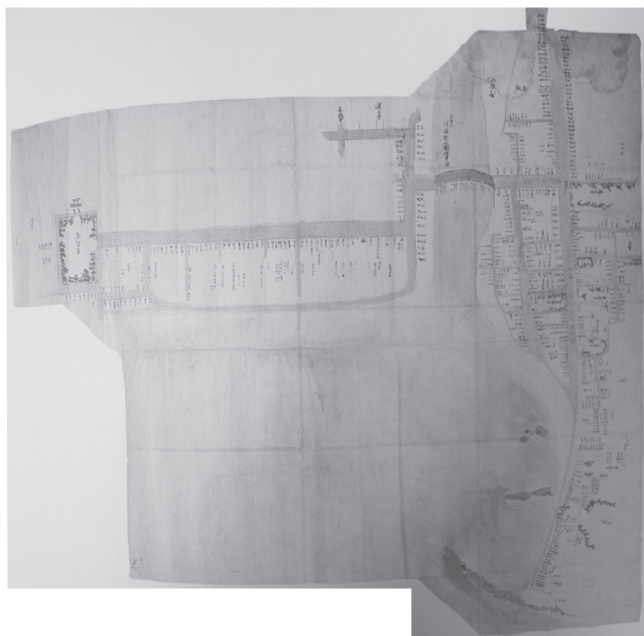


写真 1-1 輪島町絵図

れているが、それは絵図上に記載された文字情報による。輪島川によって隔てられる河井町と鳳至町を繋いで、輪島大橋が架けられている。絵図はこの大橋を、まさに大きく描き、かたわらに「宝暦改 川幅五十一間 橋四十八間」と記している。ちなみに、輪島大橋は「いろは橋」とも呼ばれており、それは長さ四八間の四八がいろは文字の四八に通じるからという。<sup>13)</sup>ともあれ、この絵図上の記述から「輪島町絵図」は宝暦期（一七五一～一七六四年）以降の作と考えられてきたのであるが、古地震研究会ではさらに考察を深め、「御塩蔵」の位置から絵図作成の下限を天保四（一八三三）年十月の地震以前とした。<sup>14)</sup>加賀藩の塩蔵は、地震以前には絵図に見えるように「重蔵宮」の東隣にあったが、津波の被害を受けたため、文久三（一八六三）年までには山側の高台に移されていたからである。<sup>15)</sup>

「輪島町絵図」は彩色されたものである。ただ彩色の仕方は、河井町の部分と鳳至町・海士町・輪島崎村の部分とは明らかに異なっている。河井町の部分は肌色を基調とし、鳳至町・海士町・輪島崎村の部分は黄色を基調としている。また、河井町の部分は町の一部の描画にとどまるのに対して、鳳至町・海士町・輪島崎村の部分は町のほぼ全域が描かれている。



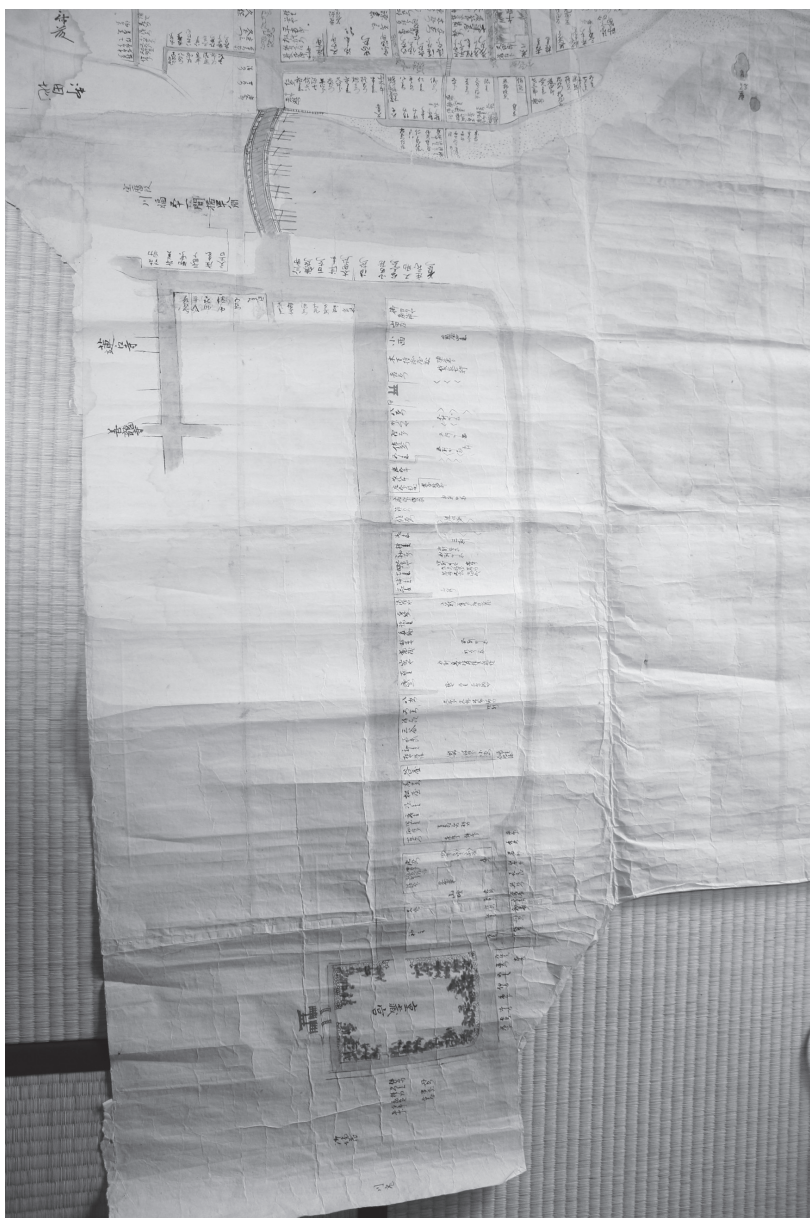


写真1-2 河井町

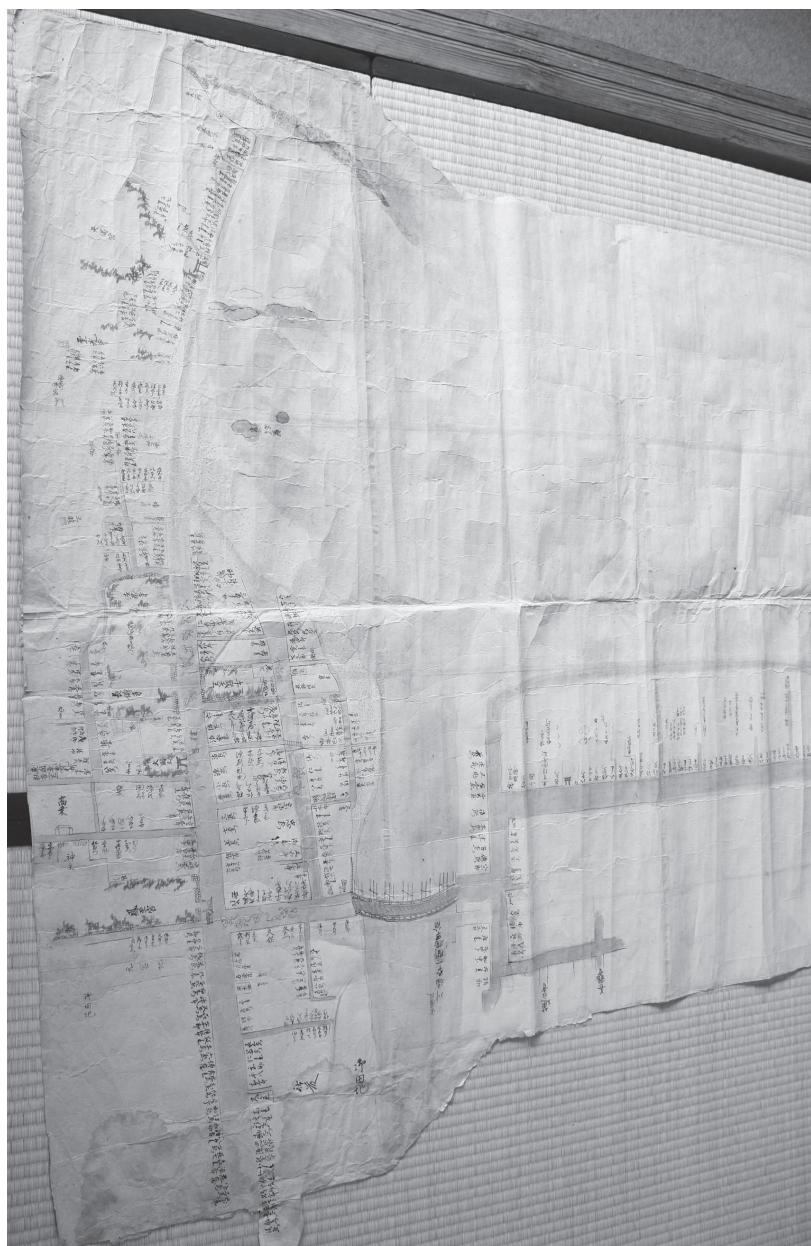


写真1-3 鳳至町・海士町・輪島崎村





図 1-1-2 河井町 (東側)

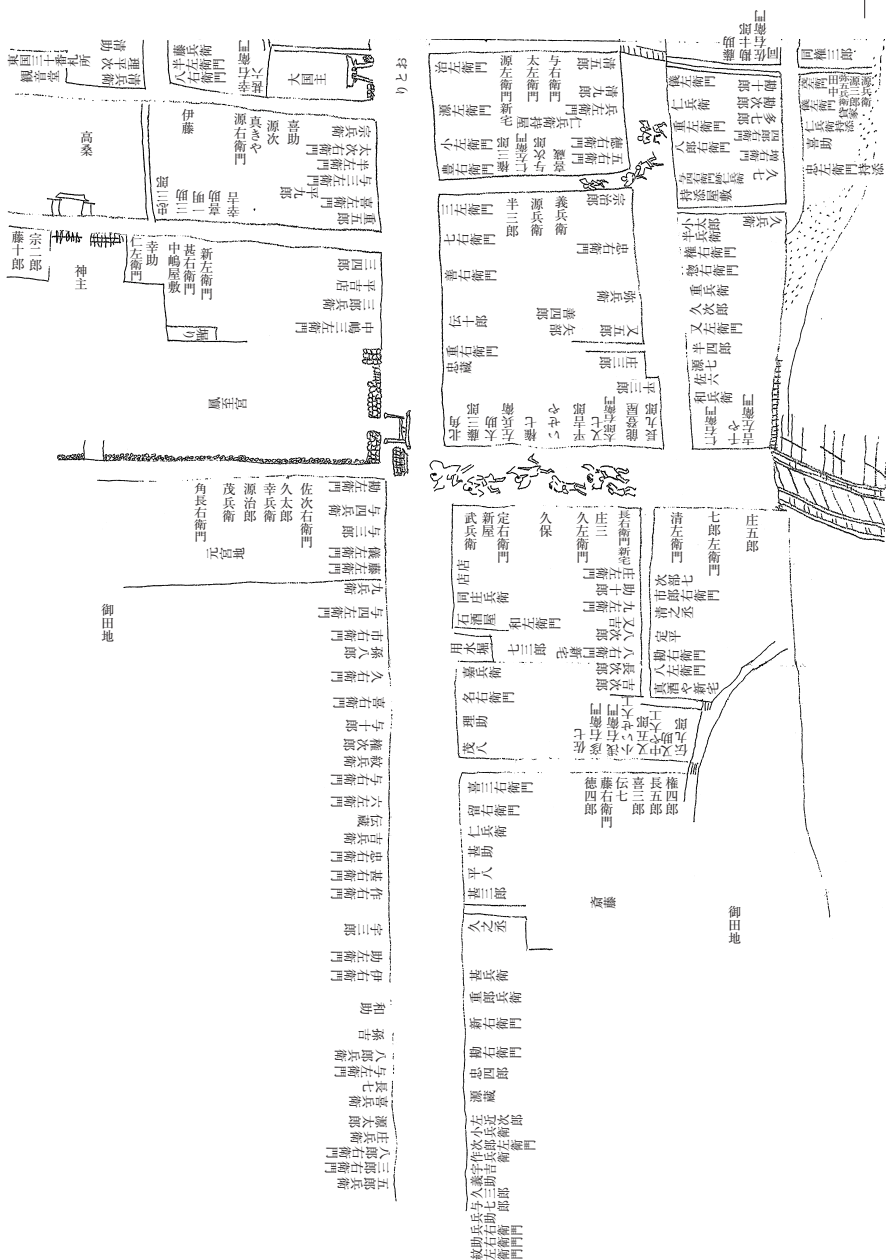


図 1-2-1 鳳至町 (南側)

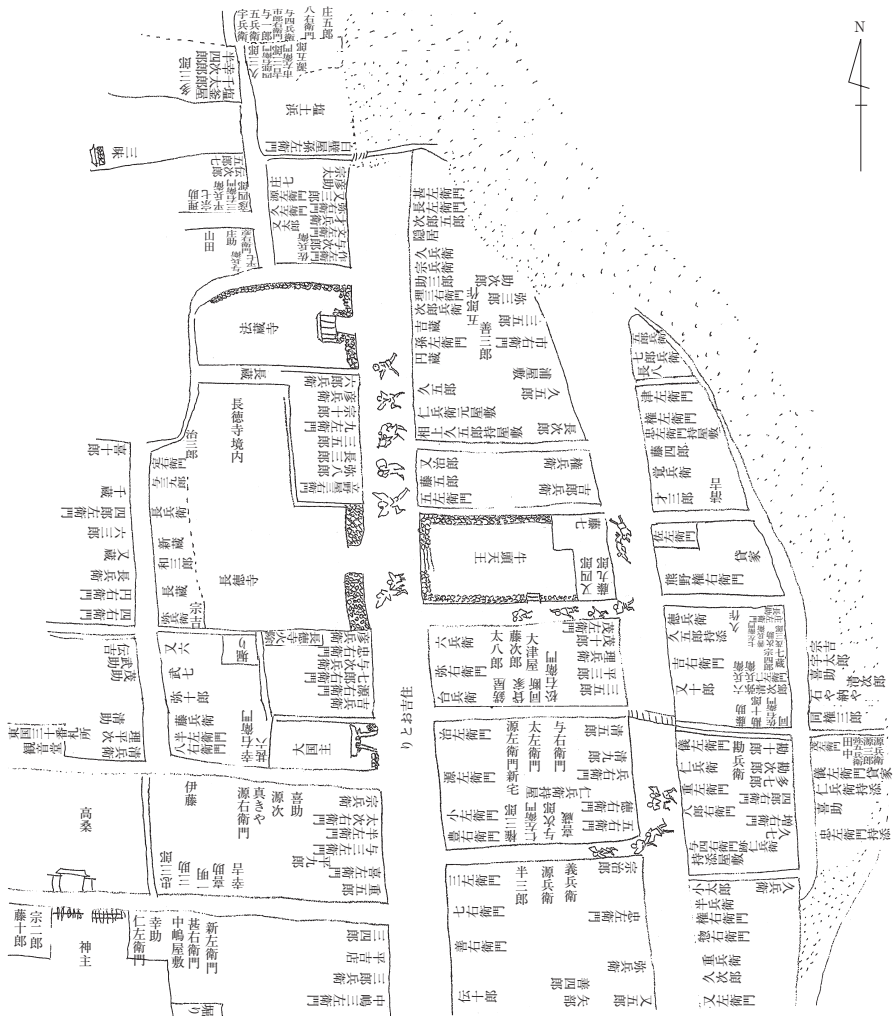


図1-2-2 鳳至町（北側）





图 1-2-3 海士町



図1-2-4 輪島崎村

河井町の部分の描画が町の一部にとどまる理由について、絵図は語ることはない。描かれたのは、輪島川から重蔵宮にいたる間の海岸に沿った一画を中心とする地域である。家数は、「八三郎」というように名前の記されるものと、「貸家七軒」というように名前がなかった何軒と記されたものを合わせると二〇三軒に及ぶ。ちなみに河井町の家数は、享保二十一年（一七三六）年三四九軒、天明二（一七八二）年四八八軒、天保四（一八三三）年七〇九軒、安政五（一八五八）年一一〇五軒と推移してきている。<sup>16</sup> いま仮に、津波に襲われた天保四年の家数と比較すれば、絵図には惣家数の約二九パーセントの家が記されていたことになる。

輪島川の方から東に真っ直ぐに延び重蔵宮に突き当たっている通りは、現在朝市が開かれている本町通りと中浜町通りだろう。家々はびっしりと建ち並んでいるが、重蔵宮に向かって左側、つまり海側だけに限られ描かれている。表通りに面した家々の背後には主に貸家が建ち並んでいた様子が窺われ、これらの家々は小路沿いに海浜近くにまで及んでいたものと思われる。

ひととき大きく描かれている「重蔵宮」は、河井町の氏神で

ある。また、本町通り西側の鳥居が描かれるところは市姫社だろう。河井町と鳳至町は「輪島両町」とも称され輪島四か所の中心であったが、元来は行政単位を異にするものでもあったためか、近世を通じて争い事が絶えなかった。<sup>17</sup> 争いのなかには延喜式内社の「鳳至比古神社」の社号をめぐる重蔵宮と鳳至宮（住吉神社）との激しい争いがあったほか、月並市や、祭礼の際に開かれるお斎市でも両町は激しく争っていたことなどが知られる。

次に、「輪島町絵図」の鳳至町・海士町・輪島崎村の部分について見てみることにしよう。この三か町村の部分については、河井町の部分と異なり、町村の領域のほぼ全域が描画されている。記された家数は、鳳至町三九三軒、海士町四一軒、輪島崎村八二軒となる。ちなみに鳳至町の家数は、享保二十一年二五五軒、天明二年三〇七軒、天保四年五〇五軒、天保五年五五四軒、嘉永七年六九二軒、安政五年七〇二軒という推移を示している。<sup>18</sup> 海士町は天保四年一三〇軒、輪島崎村は同年一一五軒を数える。<sup>19</sup> ここでも仮に、天保四年の惣家数に対する比率を求めるなら、鳳至町は約七八パーセント、海士町は約三二パーセント、輪島崎村は約七一パーセントの家が記されて

いたことになる。三か町村間の比率の差異については明らかにしない。なお、鳳至町について記された家数から見る限り、三九三軒という数値は、家数が年々増えていたと仮定すれば天明二年から天保四年にいたる間の数値ということになる。

鳳至町は描画の様子からも、賑わいのある町場であったことがわかる。大小何本もの通りが縦横に交差し、通り沿いには家々が立ち並び、絵図では省略されたと思われるが路地裏にも家々が密集していたのだろう。住民が従事していた職業は、天保十四年「輪嶋鳳至町諸商売并家内人数相調理書上申帳」<sup>(20)</sup>によると、塗物・索麺といった当時地場産業として確立していた業種に携わる者が多いことはもとよりであるが、ほかにも煎餅・小菓子・饅頭・団子・蕎麦屋などの食物屋や多くの日雇の存在が目を引き、この地が都市としての発展を遂げていたことが窺われる。

町のほぼ中央南寄りに見える「鳳至宮」は、鳳至町の氏神である。境内には同町の市姫社が祀られており、現在夕市が開かれている。町の北はずれには「塩土浜」が見え、その奥には「三昧」が描かれている。眼を海上に転じると「蟹ツキ岩」と名前が記された岩が見えるが、これは近世の初めから海境論に際し

て重要な位置を占めてきた岩であり、そのことがわざわざ名前をとどめさせた理由であろう。<sup>(21)</sup>

「海土町」は、寛永初期に能登へ旅稼ぎに来るようになった西国海民が作り上げた町である。<sup>(22)</sup>当初、鵜入村に住んだが、正保三（一六四六）年に光浦村へ移り、慶安二（一六四九）年にいたり鳳至町地内に加賀藩より居屋敷を拝領して定着するようになったのではないかと考えられている。絵図上では「海土町通」沿いと、「海土町舟揚場」を取り囲むようにして密集する家々が描かれている。当初は一三軒であったという海土も、元禄期には五〇軒余、安永期には一〇〇軒余になったという。稼ぎの中心は、輪島沖に浮かぶ舳倉島での鮑漁を中心とする漁業であるが、廻船業にも進出していたことが知られる。<sup>(23)</sup>

輪島崎村は、絵図に見えるような岩礁が防波の役割を果たしたことから、自然の良港として多くの廻船が入港してきたところである。家々は海に沿ってびっしりと建ち並んでいるが、とりわけ「天満宮（輪島前神社）」以北に港としての機能が集中していた。絵図に記される沖崎・刀禰・浦野・板屋・宮野屋・浅津屋・木屋は船宿であり、「御番所」は潤改番所である。宮野屋には「客船帳」三冊が残されており、主に西廻り航路上の

湊浦から多くの廻船が来航していた様子が窺われ、なかには江戸からの廻船も見られた。<sup>(2)</sup>「弁天」の側に湧き出る「池」は廻船の給水池で、絵図には見えないが岬先端の日和山には、享和四（一八〇四）年銘の方角石が現在も残っている。

## 二 庄内沖地震と震災

ここでは庄内沖地震と、この地震によって引き起こされた震災の様相を、古地震研究会の成果に学びながら検討しておきたい。<sup>(25)</sup>

天保四（一八三三）年は、天保大飢饉の始まりの年にあたる。この年の十月二十六日（十二月七日）、羽前庄内の日本海沖を震源とする地震が発生した。図二に、各地の震度と津波波高を示した。地震の発生は八ツ時（午後二時）過ぎ、震源は庄内平野の沖合三〇キロメートルほどのところで、マグニチュードは七・八程度と推定されている。最大震度は六、最大の津波波高は七メートルから八メートルとされる。地震の及んだ範囲は広く、北東は津軽・松前、南西は越中・能登までと、北東日本海海域の全域に及んでいる。

鶴岡に藩庁を置く譜代の庄内藩では、最大震度の地震と最大波高の津波に襲われた。この地震を記録した諸史料を突き合わせて得られた同藩の被災状況は、「町家潰家」三二、「同痛家」四四三、「民家潰家」四六三、「同流失」一八、「同痛家」一八五一、「死人」四四、「怪我人」一二となる。

一方、輪島でのこの地震を記した諸史料によると、前日の二十五日の夜に前震があり、二十六日の七ツ時（午後四時）前ないし八ツ時の下刻（午後二時半頃）に大きな揺れがあった。揺れは長く続いたが、半時（二時間）には及ばなかった。いずれの史料も地震動による被害について全く触れていないので、輪島での震度は他地点との比較から四程度と推定されている。ところが、地震発生から約一時間半後の七ツ時（午後四時）になって、押し波で始まる津波が襲来し、二波または三波目におよそ五、六間（約七～一メートル）の最大波高に達したと史料は伝えている。もともと津波の最大波高について、古地震研究会では現地での調査の結果、輪島での浸水高は五・七メートル程度との数値を導き出している。

輪島では地震動による被害はなかったものの、地震のあと押し寄せた津波によって甚大な被害がでた。被害の状況を「住吉

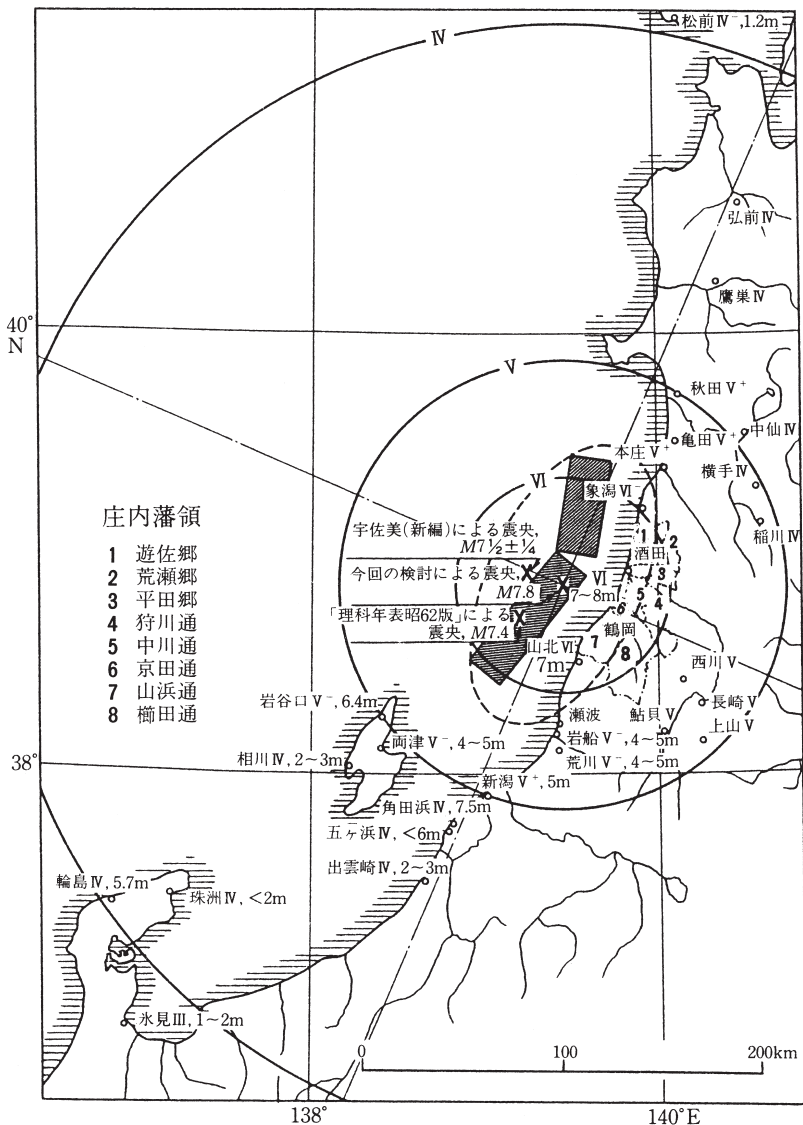


図2 天保四年地震の震度および津波波高分布と最適断層モデル

(注) ローマ数字は震度、算用数字は津波波高、ゴシックの数字は郷・通、斜線部は最適断層モデルを示す。(萩原尊禮編著『続 古地震—実像と虚像』収載図)



神社文書」から示すと、津波によって「皆潰流失」「皆潰」「半潰」になった家は、河井町一二九軒、鳳至町一四四軒、海士町三一軒、輪島崎村六五軒で、「溺死者」は河井町二五人、鳳至町一五人、海士町一人、輪島崎村六人を数えている。死者の数はなんと輪島四か町村で、庄内藩全域での死者四四人を上回り四七人に及んでいたことが知られる。溺死者四七人について、地震三日後の二十九日までに二一人の死骸が流れ寄り身元を確認できたが、残りの二六人は十二月に入ってもなお大半が行衛不明のままであった。<sup>(27)</sup>

鳳至町については、震災に関してより詳細な状況がわかるので記しておこう。住吉神社に「輪嶋鳳至町津波打揚潰家等相調理書上申帳」<sup>(28)</sup>と題される史料が伝わっている。これによれば、天保四年十月当時、鳳至町の惣家数は五〇五軒で、前述のように内一四四軒、比率では約二九パーセントの家が津波の被害を受けたことになる。被害状況は「皆潰流失」一〇一軒、「皆潰」一八軒、「半潰」二五軒を数える。住居とする家のほかに附属家の被害状況も記されており、物置四四、うち「皆潰流失」二二、「皆潰」一一、「半潰」一一、納屋と物置戸前等が「皆潰流失等」四〇、雪隠が「皆潰流失等」一三六、であった。ほか

にも、猟船三艘、小舟一艘、引網一統が「流失」している。また、この史料は家一軒ごとの被災状況も記しているので、それを一覧にして示すと表一のようなになる。被災した家の大半は頭振であるが、これは同身分の者が災害を受けやすいような悪条件の場所に居住していたからではなく、鳳至町、河井町も含めて、前述のように住民のほとんどが頭振であったからにほかならない。

溺死人は、鳳至町では一五人であった。津波に襲われた二日後の二十八日には、八人の死骸が確認されている。史料を引用すれば、次のようである。<sup>(29)</sup>

#### 溺死人

善正寺

一老人

十左衛門妹もと

但、歳三拾

メ葛籠二入同人宅二有

善正寺

一老人

故勘十郎祖母はつ

但、歳八拾四

同

表1 鳳至町津波被害家一覧

番号	身分	名前	礎 家			附 属 家		
			皆潰流失	皆潰	半潰	皆潰流失	皆潰	半潰
1	百姓	義左衛門	6×8.5			物置2、雪隠		
2～7		同貸家	2×3/6軒					
8		同貸家	6×5			物置、納屋、雪隠		
9	百姓	久五郎	6.5×7			納屋、雪隠		
10	同	権右衛門	6×8			物置3、物置戸前、 納屋、雪隠		
11	同	七郎兵衛	4×3			物置、雪隠		
12	同	諸兵衛	4.5×7			納屋		物置、物置戸 前、雪隠
13	同	久兵衛	4×7			納屋、雪隠		
14	同	又五郎	2.5×3			雪隠		
15	頭振	源五郎	7×2.5			掘込納屋、雪隠		
16	同	久三郎	4.5×4					物置、雪隠
17	同	権太郎	3×2.5			雪隠		
18	同	三平	4×4			雪隠		
19	同	長左衛門	3×3			雪隠		
20	同	与七	3×3			雪隠		
21	同	伝次郎	3.5×4			雪隠		
22	同	与兵衛	3×4			雪隠		
23	同	久左衛門	3×4			雪隠		
24	同	与四右衛門	9尺×2			雪隠		
25	同	久之助	9尺×2			雪隠		
26	同	源三郎	4×3.5掘込家			雪隠		
27	同	次右衛門	2.5×3掘込家			雪隠		
28	同	又太郎	4×5.5			雪隠		
29	同	清八	3×3.5			雪隠		
30	同	甚左衛門	2×2			物置、雪隠		
31	同	庄七	3×5			雪隠		
32	同	次郎五郎	4×4.5			雪隠		
33	同	吉四郎	2.5×6			雪隠		
34	同	長右衛門	4×5			雪隠		
35	同	久七郎	3.5×4.5			雪隠		
36	同	長四郎	3×5			雪隠		
37	同	惣兵衛	3.5×4			雪隠		
38	同	五左衛門	3×5			雪隠		
39	同	惣兵衛	2.5×5			雪隠		
40	同	助三郎	2.5×6.5			雪隠		
41	同	五郎兵衛	3×3			雪隠		
42	同	長八	4.5×7.5			物置、納屋、雪隠		
43	同	津兵衛	3×5			納屋、雪隠		
44	同	権左衛門	3.2尺×5.5			物置、雪隠		
45	同	弥三兵衛	3×11				物置、雪隠	
46	同	藤四郎	3×6				物置、雪隠	
47	同	清吉	4.4尺×5			物置、掘込納屋		
48	同	六四郎	3×3			雪隠		
49	同	五郎助	3.5×3.5			雪隠		
50	同	孫兵衛	3×3.5			雪隠		
51	同	与二右衛門	3×3			掘込納屋、雪隠		
52	同	義兵衛	2×3			雪隠		
53	同	与三兵衛	3×4			雪隠		
54	同	善左衛門	2.5×2.5			雪隠		
55	同	七左衛門	3.5×3.5			雪隠		
56	同	七五郎	3.5×3.5			雪隠		
57	同	次郎助	3×3			雪隠		
58	同	惣四郎	3.5×3.5			雪隠		
59	同	茂三郎	3×3.1尺			雪隠		
60	同	久作	3.4尺×3			雪隠		
61	同	長助	2×3.5			雪隠		

番号	身分	名前	礎 家			附 属 家		
			皆潰流失	皆潰	半潰	皆潰流失	皆潰	半潰
62	頭振	庄左衛門	2×3			雪隠		
63	同	惣吉	2.5×2.5			掘込納屋、雪隠		
64	同	喜太郎	2.5×2.5			雪隠		
65	同	久助	3×4			雪隠		
66	同	清次郎	2×3.5			物置、納屋、雪隠		
67	同	義作	2.5×6			雪隠		
68	同	弥三兵衛	3×3.5			雪隠		
69	同	六兵衛	3.4尺×3			雪隠		
70	同	佐右衛門	3×4			雪隠		
71	同	三藏	3×4			雪隠		
72	同	勘兵衛	4×4.5			雪隠		
73	同	勘十郎	3×4			物置、雪隠		
74	同	太十郎	3×3.5			物置、雪隠		
75	同	四郎右衛門	3×3			掘込納屋、雪隠		
76	同	増右衛門	4×3			物置、雪隠		
77	同	徳三郎	2.5×2.5			雪隠、須船1艘		
78	同	半右衛門	3.1尺×4			掘込納屋、雪隠		
79	同	久七	3×3			掘込納屋、雪隠		
80	同	平右衛門	2×2.5			雪隠		
81	同	十兵衛	3×5			物置、雪隠、小舟 1艘		
82	同	彦助	5.5×6			物置、雪隠		
83	同	五三郎	3×5.5			掘込納屋、雪隠		
84	同	清右衛門	3×3.5			雪隠		
85	同	弥右衛門	3×5			掘込納屋、雪隠		
86	同	才兵衛	3×5.5			雪隠		
87	同	文左衛門	3×4				物置、雪隠	
88	同	才右衛門	3×5			雪隠		
89	同	作左衛門	4×6			物置、雪隠		
90	同	助次郎	4.5×5			納屋、雪隠		
91	同	弥三郎	2.5×2.5			雪隠		
92	同	五郎作	2.5×2.5			雪隠		
93		同貸家	3×3			雪隠		
94	頭振	善三郎	2.5×3			雪隠		
95	同	義右衛門	2.5×4			掘込納屋、雪隠		
96	同	権兵衛	3×4			納屋、雪隠		
97	同	吉郎兵衛	2.5×3			雪隠		
98	同	藤九郎	3×2.5			雪隠		
99	同	佐一郎	9尺×2			雪隠		
100	同	茂左衛門	3×5			雪隠		
101	同	茂三郎	9尺×3			雪隠		
102	百姓	孫左衛門		5×6.5			納屋、雪隠	
103	頭振	七助		2.5×2		雪隠		
104	同	平右衛門		2.5×4		納屋、雪隠		
105	同	覚兵衛		3×6			物置、雪隠	
106	同	才三郎		5×7.5			物置、雪隠	
107	同	宇兵衛		3×4.5			雪隠	
108	同	佐右衛門		4.5×4.5			物置、雪隠	
109	同	吉右衛門		4×7			物置、物置戸 前、雪隠	
110	同	又十郎		5×6.5			物置、物置戸 前、納屋、雪隠	
111	同	藤助		3×2.5			物置、雪隠	
112	同	市右衛門		2.5×3.5			雪隠	物置
113	同	理兵衛		4×5			雪隠	
114	同	平三郎		4×4.5			雪隠、物置戸前	
115	同	善五郎		4.2尺×6			物置、雪隠	
116	同	松右衛門		4.5×4			雪隠	
117	同	清五郎		4.5×4.5			雪隠	

番号	身分	名前	礎 家			附 属 家		
			皆潰流失	皆潰	半潰	皆潰流失	皆潰	半潰
118	頭振	惣太郎		2.5×3			雪隠	
119	同	久兵衛		4.5×5.2尺				
120	百姓	長次郎			4×6			雪隠
121	同	清九郎			4×5			
122	同	又四郎			4.5×3.5			雪隠
123	同	伊左衛門			4×6			雪隠
124	頭振	市左衛門			3.5×5			物置、雪隠
125	同	四郎右衛門			4.5×3			物置、雪隠
126	同	幸次郎			4.5×2.5			雪隠
127	同	千太郎			3×5			雪隠
128	同	庄助			3.5×4掘込家			雪隠
129	同	佐平			4×4			物置、雪隠
130	同	六郎右衛門			2×4			雪隠
131	同	太三右衛門			2×5			雪隠
132	同	理三右衛門			4.5×5		物置、雪隠	
133	同	次郎兵衛			2.5×3			雪隠
134	同	藤七			5×5			
135	同	徳左衛門			2×3			雪隠
136	同	源七			2.5×5.5			雪隠
137	同	平四郎			4×5			雪隠
138	同	久次郎			4×6	掘込納屋、雪隠		
139	同	宇兵衛			3×3			雪隠
140	同	伝九郎			2.5×3	雪隠		
141	同	又助			2.5×2.5			雪隠
142	同	与左衛門			4×3.5	雪隠		
143	同	太左衛門			4×4.5			
144	同	権四郎			3×4			
145	百姓	仁兵衛				物置		
146	同	八郎右衛門				物置并戸前3軒		
147	同	忠左衛門				物置、物置戸前		
148	同	権三郎				物置、猟船1艘		
149	同	庄五郎				掘込納屋		
150	同	吉郎左衛門				物置戸前、雪隠		
151	同	長九郎				納屋	物置	
152	同	十兵衛				納屋		
153	同	半兵衛					物置、雪隠	
154	頭振	三四郎				掘込納屋、猟船1艘、引綱1統		
155	同	円蔵					納屋	
156	同	重左衛門				物置戸前		
157	同	和兵衛					物置、物置戸前	
158	同	清四郎				納屋、雪隠		
159	同	丈左衛門				掘込納屋、雪隠		

注1) 天保4年10月「輪嶋風至町津波打揚潰家等相調理書上申帳」(『能登輪島住吉神社文書目録』G96)による。

2) 単位は間。0.5は半間を示す。

一 耆人

同人娘いよ

但、歳貳拾

ノ式人共箱ニ入徳五郎宅ニ有

長徳寺

一 耆人

宗吉妻すへ

但、歳六十三

同

一 耆人

同人娘しを

但、歳廿四

ノ兩人共箱ニ入三昧ニ仮り埋

浄明寺

一 耆人

甚左衛門養母きく

但、歳六十六

ノ箱ニ入源助宅ニ有

興徳寺 仏照寺

一 耆人

増右衛門

但、歳七十七

ノ箱ニ入覚兵衛宅ニ有

長徳寺

一 耆人

養左衛門母きく

但、歳六十

ノ箱ニ入同人屋敷之内ニ有ル

ノ八人

右、昨日溺死人拾五人書上置候内、前段之通只今迄ニ仕抹  
仕置、残り七人今以相見江不申ニ付、宜敷御書上可被下候、  
尤此後死骸見当り次第御断可申上候

巳十月廿八日

鳳至町

肝煎

河原田組

御取次所

確認された八人の溺死人のうち、男性一人のほかは全て女性  
であつた。男性は七七歳になる高齢の増右衛門である。女性は  
二〇歳から八四歳になる者で、二〇歳代二人、三〇歳代一人が  
含まれている。溺死人のうち、二十八日時点ではまだ見つかっ  
ていない七人について、同じく史料を示せば次の通りである。<sup>30)</sup>

溺死人之内未タ見当り不申分

長徳寺

一 耆人

弥兵衛

七十三

長楽寺

一老人

伝次郎娘その

十九

照願寺

一老人

与左衛門妹つき

廿九

一老人

右つき孤子みな

十四

長徳寺

一老人

善左衛門

三十八

長楽寺

一老人

佐右衛門祖母なつ

五十九

善正寺

一老人

故勘十郎妻むめ

四十五

ノ七人

(後略)

ここでも男性二人に対して女性は五人に及び、年齢も一〇代二人、二〇代一人が含まれている。理由はわからないが、鳳至町では溺死人一五人のうち女性が一二二人にも及んでいたのである。なお、佐右衛門祖母なつに関しては、次のような史料が伝わっている。<sup>③</sup>

覚

一歳五十九

鳳至郡河原田組輪嶋鳳至町

故佐右衛門祖母なつ

但、代々浄土真宗輪嶋村長楽寺旦那

右、私祖母なつ義、当十月廿六日地震後津波打揚、輪嶋町等人家多ク潰、溺死人も多数御座候而、其節より行衛相知不申、若溺死仕候哉与奉存先達而御断申上候、然処当七日私在所領渚江死骸流寄候を見付、其後御達申上候所、為御見届今日各方御出役死骸御見分之上、私手前御尋ニ御座候、当十月廿六日八つ下刻地震仕、引続是迄も不覚殊之外引汐仕候ニ付、ケ様之節ハ津波立可申与兼而聞伝御座候ニ付、家内不残逃出候途中ニ祖母なつ相見江不申候得共、何方得欺逃行候与奉存、少し引汐ニ相成候故方々相尋候得共知辺



無御座候、左候得ハ逃後レ大波打かぶり海中江引流され溺死仕候哉与奉存、其節御断申上候所、御郡御奉行所御詮義之上委曲口書を以申上置候通ニ御座候、就夫私昨七日朝輪嶋崎村へ用義在之、右渚通り懸候所死骸流寄居候を見付得与見請候得ハ私祖母なつ二相違無御座候ニ付、御断申上候段申上候所、其節前後頻敷ニ而も見聞不仕哉、且何方江たいし申分之筋も在之候ハ、無泥可申上旨重々御糺ニ御座候得共、左様之義等曾而無御座、則町役人中御立会死骸御見分御座候通、溺死之鉢外異変之義無御座候ニ付、死骸私江御渡勝手次第葬候様被仰渡承知仕候、右就御尋口書を以申上候通少茂相違無御座候、以上

佐右衛門の語るところによれば、二十十六日の地震動の直後「是迄も不覚殊之外引汐」になったので、「ケ様之節ハ津波立可申与兼而聞伝」えていたから、家内全員で逃げ出したが、途中から祖母なつの姿が見えなくなりました。潮が引いてから方々を探したが見つからなかったので、溺死したものと覚悟していた。月日も立ち十二月に入った七日の朝、輪嶋崎村に用事があるので渚を通りかかった時、流れ寄っている死骸を見つけたので確認したところ祖母なつであつたというのである。ほか

にも、与左衛門妹つきの子みなの死骸が、十一月に入つて見つけたという史料も伝わっている。<sup>(33)</sup>

ところで、ここ輪島でも大災害に直面して、いわゆる「災害ユートピア」現象があらわれていた。北原糸子によれば、幕末期の日本社会で、日常的世界では他人から「施し」を受けることを「恥」だとする通念が人々の間に広く行き渡っていたにもかかわらず、安政大地震のような非日常的事態に直面したときには、人々の日常的通念は打ち碎かれ被災者の間に「御救い」を喜んで受けるという価値観の転換が起きていた。それは救われる側だけのことでなく、救う側の人々の間にも日常的には起こることのない施行の行為が広く伝播していたというのである。それを災害ユートピアと捉え、社会自体に埋め込まれている機能回復への自然な作用の発動とみる。

鳳至町の分限者であつた中嶋屋では、津波に襲われた当日に被災者への「見舞」を行つている。<sup>(34)</sup> 見舞いの品々は当面して必要であつた物品が主で、苳・縄、米・味噌・菜草・茄子漬・香の物・御く文字・つくね飯、酒、膳腕・鍋、行燈、寝間着・綿入・袷・単衣物・帯などであつた。十一月に入ると、「家財物置共皆潰流失仕及難義者共」へ銭の施しを行つている。<sup>(35)</sup> 七九人

には一人につき錢三〇〇文宛、四三人には一人につき錢二〇〇文宛、合計で錢三二貫三〇〇文に及ぶものであった。

中嶋屋のほかにも、十一月に入ると、「津波ニ付流失等仕候極難決者共」への富裕層による施行が相次いだ。<sup>②</sup>北角吉郎右衛門と浜屋忠左衛門は一二八軒に対して米三一石五斗、長井屋庄兵衛は八五軒に錢四二貫五〇〇文、三六軒に金二兩一分、久保屋喜兵衛は八五軒に錢二一貫二五〇文、久保屋久五郎は七五軒に錢一八貫七五〇文、岩屋彦兵衛は八五軒に錢八貫五〇〇文の施しを行っている。

こうした地域住民による無償の施行に対して、藩のとった災害対策は米の貸付であった。鳳至町へは米一〇八石二斗五升が貸し付けられ、これを翌天保五年から一五か年賦で返済する取り決めであった。<sup>③</sup>また、津波被害を検分するため役人の来町も相次いだ<sup>④</sup>が、その出費もままならないものであった。<sup>⑤</sup>例えば、郡奉行は北角家に宿を取り検分に当たったが、町では芹・椎茸・麩・塩鳥・鯛や油・中折紙・炭・蠟燭などを用意するため、相当額の出費を強いられていたことがわかる。

災害ユートピアは地域住民の間で見られた現象であり、為政者の側は「御救い」という政策として災害に対処していた。

### 三 絵図に記録された津波

ここでは再び、「輪島町絵図」の分析に復帰することにしよう。先にも記したように「輪島町絵図」は、河井町の部分と鳳至町・海士町・輪島崎村の部分とでは、明らかに描画法が異なっている。違う人物によって描かれた二枚の絵図を貼り付けて、一枚の大絵図に仕立てたもののようにさえ思われる。この大絵図は、一体どのような機会に、どのような目的をもって描かれたのであろうか。

まず、「輪島町絵図」に描かれた河井町の部分についてであるが、実はこの描画に似た絵図が別に存在することに注目される。それは『能登輪島住吉神社文書目録』で、「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」と題されるものである。<sup>⑥</sup>絵図を撮影したものが写真二である。写真二―一が本町通り・浦浜通りの西側、写真二―二が中程、写真二―三が東側となる。これもトレースしたものを図三に示した。写真二に対応するように、図三―一が西側、図三―二が中程、図三―三が東側と三分割した。

この「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」は、目録に「天保四



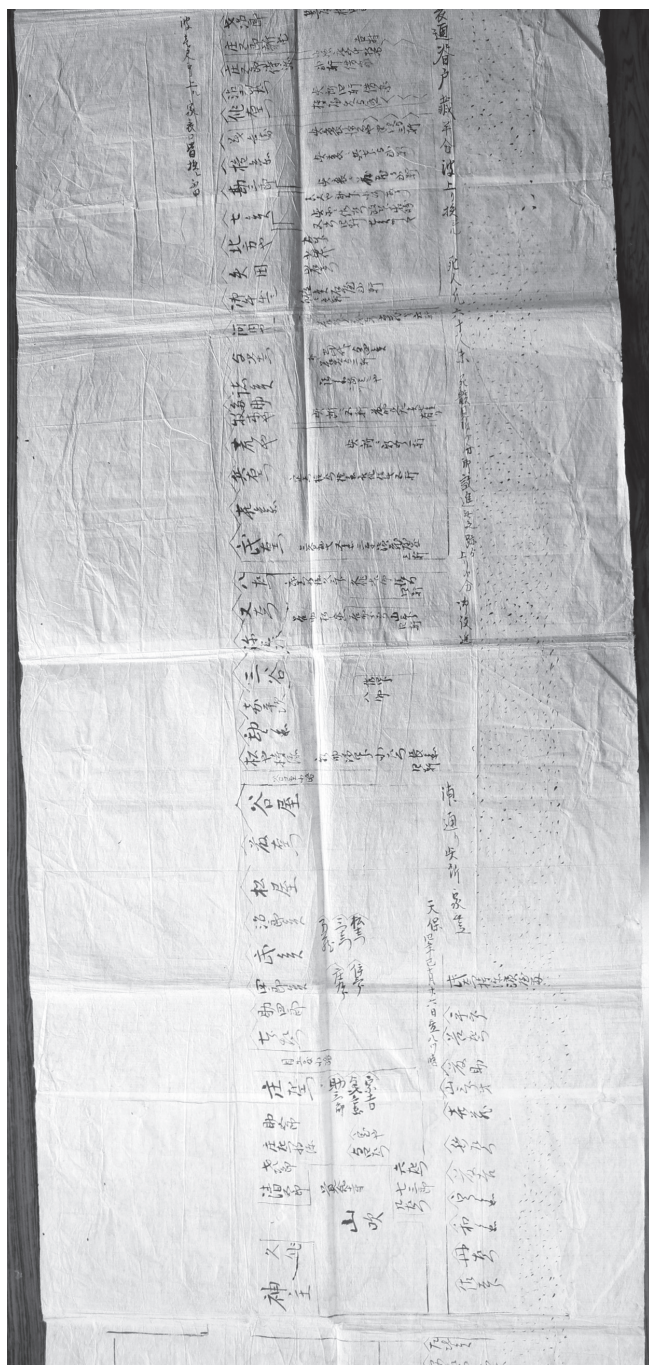


写真 2-2 輪島河合町本町通・浦浜通絵図（中程）



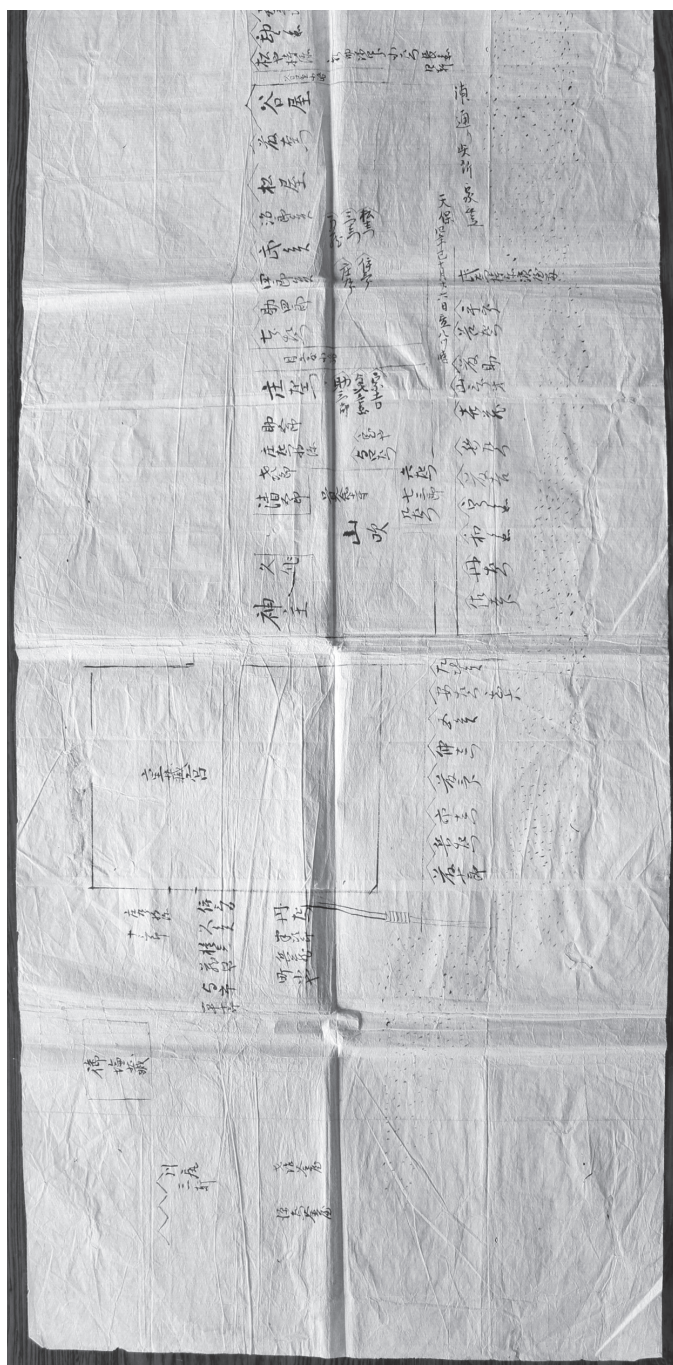


写真 2-3 輪島河合町本町通・浦浜通絵図（東側）

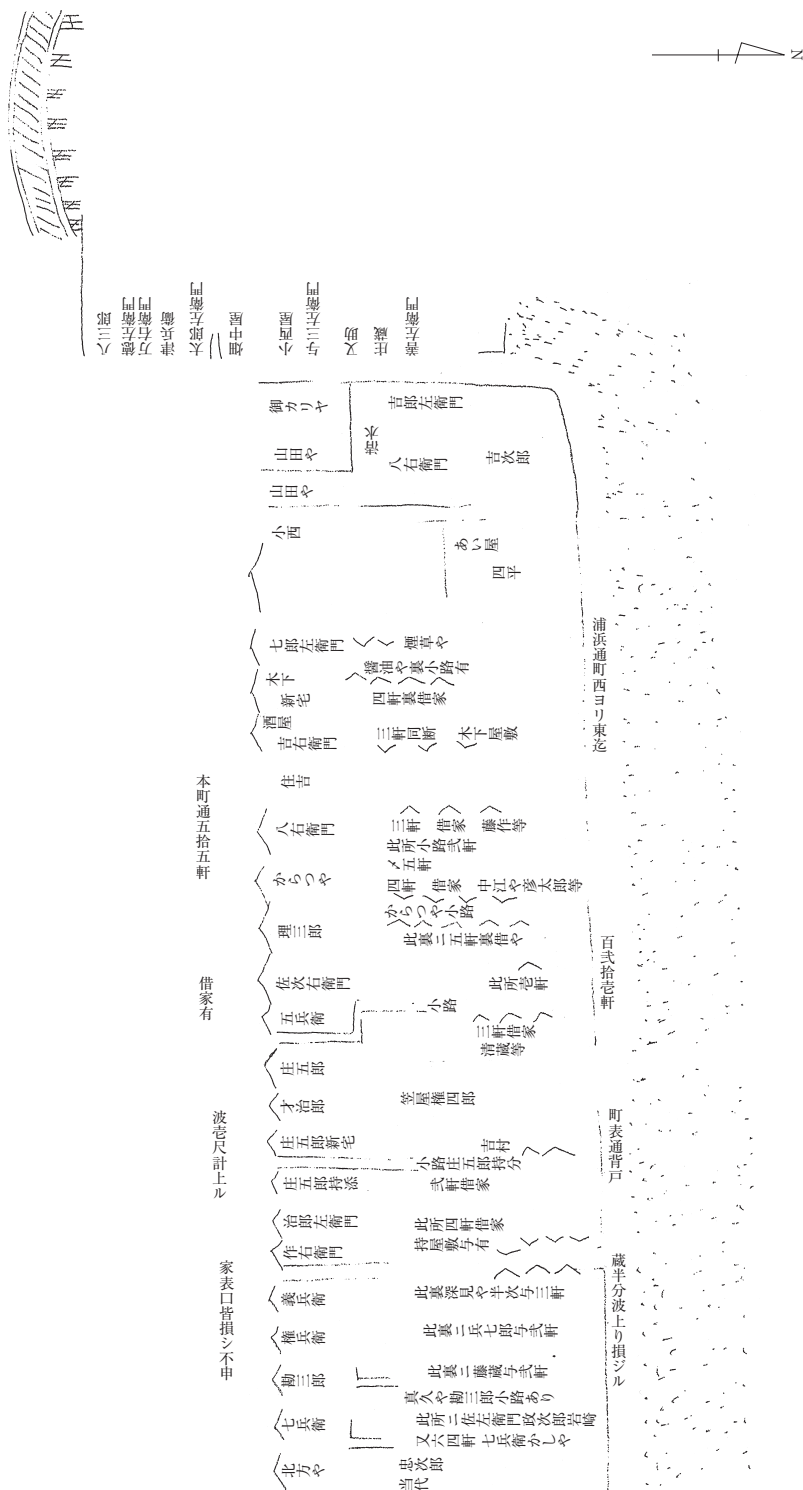
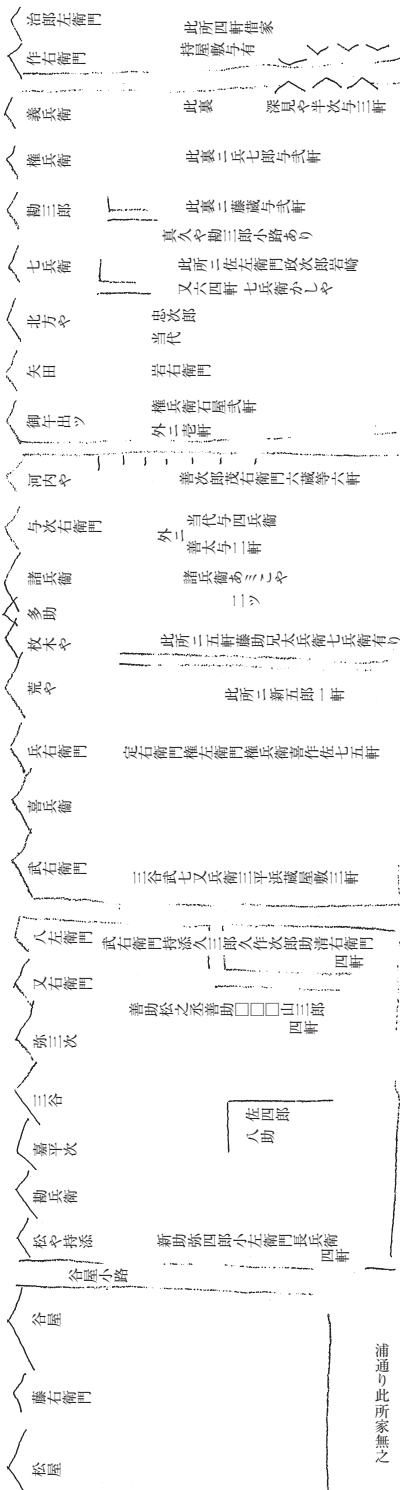


図3-1 本町通り・浦浜通（西側）

家表口皆損シ不申



蔵半分渡上り損シ

死人凡六十人余

死骸見附候分御註進無之

跡より上り候分御註進

浦通り此所家無之

図3-2 本町通り・浦浜通（中程）

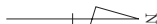


図3-3 本町通り・浦浜通（東側）



年」「津波関係」と記されているように、津波による被害状況を絵図上に書きとめたものである。絵図から津波に関する文字情報を取り出して示せば、次のようである。

浦浜通町西ヨリ東迄 百式拾壹軒

町表通背戸 蔵半分波上り損ジル

死人凡六十人余

死骸見附候分御註進無之 跡より上り候分御註進

本町通五拾五軒 借家有

波壱尺計上ル

家表口皆損シ不申

天保四年巳十月廿六日昼八ツ時

前述のように、天保四年十月二十六日昼八ツ時とは地震が起こった頃の時間であり、津波が輪島へ押し寄せるのは、地震発生から約一時間半後の七ツ時であった。絵図上の文字情報からは、この津波によって浦浜通りでは二二軒の家が被災した。死人はおよそ六〇人余りに及んだ。本町通りでは五五軒が被災したが、一尺ばかりの浸水であったため、家を損じることにはなかった。ただし、家の背戸、つまり裏に建っている蔵は全体の半分が津波によって損壊したという。

ところで、前節で示した河井町の津波による被害状況は正式に藩に届けられたもので、流失や損壊した家は一二九軒、溺死者は二三人であった。これに比較すると、この絵図の文字情報では、とりわけ死者の数に隔たりがある。おそらく「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」は、津波に襲われて間もない頃に描かれたものではないだろうか。情報が錯綜・混乱しているなかで描かれたことが、「死人凡六十人余」の数字になってあらわれたものとも思われる。むしろ、この数字の懸隔のなかに、震災現場の臨場感を読み取ることさえ可能である。

それにしても、この「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」から津波に関する文字情報の箇所を取り除けば、「輪島町絵図」に描かれる河井町の部分と似ていることに注目される。「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」で描かれた家数を確認すると、「八三郎」など名前の記されるものと、「四軒裏借家」などいうようにに名前がなく何軒と記されるものを合わせて計二〇四軒に及ぶ。この家数は二〇三軒を数える「輪島町絵図」の河井町部分より一軒多いだけである。それだけでなく、住民の名前や借家（貸家）の数などもほとんどが一致する。「輪島町絵図」の河井町の部分は、「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」から津波関係

の箇所を取り除いて引き写し、彩色をほどこしたものと書いてもよいほどなのである。それが町の全体ではなく、一部の描画にとどまった理由ではないだろうか。つまり、津波に関する文字情報は除かれながらも、結果として描かれた町の部分は津波で被災した一画であつたといえよう。

さて、次に鳳至町であるが、同町については前掲の表一のよう津波に被災した家一四四軒と、附属家の被災にとどまった家一五軒の全ての名前が判明する。そこで、これらの家の全てについて「輪島町絵図」上で特定できるかを試みてみた。この試みは古地震研究会でも行っており、約七〇パーセントの名前について特定できるとしているが、<sup>(41)</sup>ここでは約六〇パーセントにとどまった。仮に、天保四年の鳳至町の惣家数五〇五軒で、絵図に描かれた家数三九三軒を割ってみると、全体の約七八パーセントの家が描かれたにとどまっているから、ここで得た六〇パーセントの数字も決して低いとはいえないだろう。描画のあり方からは、表通りに面することなく小路などで結ばれる家々は、省略された可能性も大であつたのではないだろうか。

図四は、絵図上で特定できた津波被災家を示したものである。数字は、表一の家番号に対応する。古地震研究会では現在の地

図に落としたものを作成している<sup>(42)</sup>ので、ここでは「輪島町絵図」上に復元してみた。同研究会の分析結果は、「海岸に近いほど、また海抜が低いほど、大きな被害を被っていて、一般的傾向と矛盾しない」というもので、ここでも従いたい。実際、海岸近くと河口の近くに被害が集中していることが、はっきりと見てとれる。とりわけ、海に突き出た岬先端の海沿いに集落が開ける輪島崎村では、前述のように惣家数一一五軒のうち六五軒つまり半数を超える家が津波の被害を受けていたが、まさに領けるところである。

「輪島町絵図」の鳳至町の北端に「塩士浜」が描かれているが、津波の被害が塩浜にも及んでいたことはもとよりである。同町では塩士又次郎と同孫左衛門が被災していた。<sup>(43)</sup>絵図上、塩士浜と共に記される「白壁屋孫左衛門」は塩士孫左衛門と同一家であらうか。もし同一家ならば、孫左衛門は住居も失っていた。

ところで、「輪島町絵図」をめぐって、これまで全く見落とされてきた描画が絵図中に存在することに注目したい。何故か、同絵図を津波資料として活用した古地震研究会でも、触れることがなかった。それは、鳳至町の部分に「住吉おとり」という文字が記されていることと、同じく同町の部分に相当数の人々

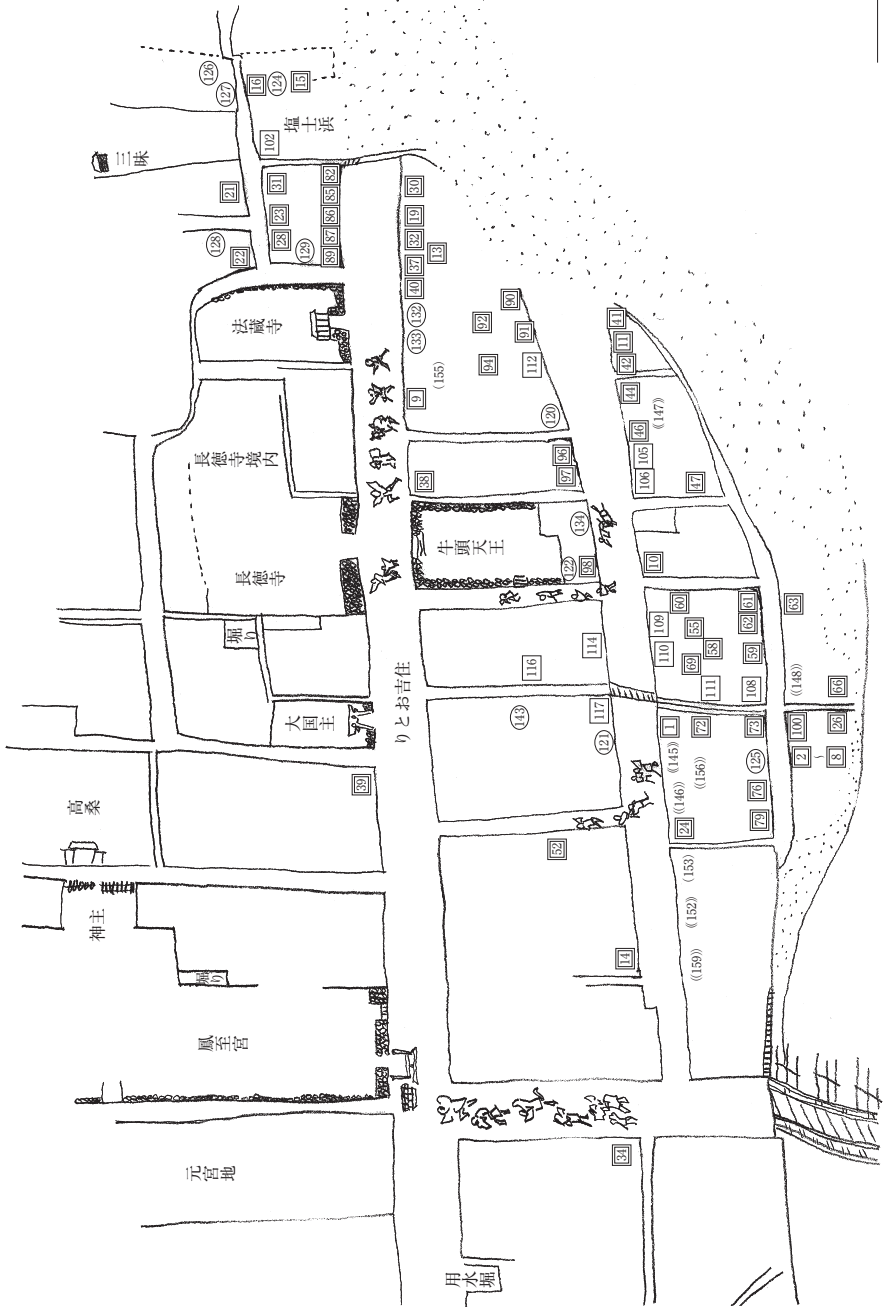


図4 鳳至町の津波被災家

注) 回は礎家皆潰流失。□は礎家皆潰。○は礎家半潰。  
( ) は附属家皆潰流失。( ) は附属家半潰。

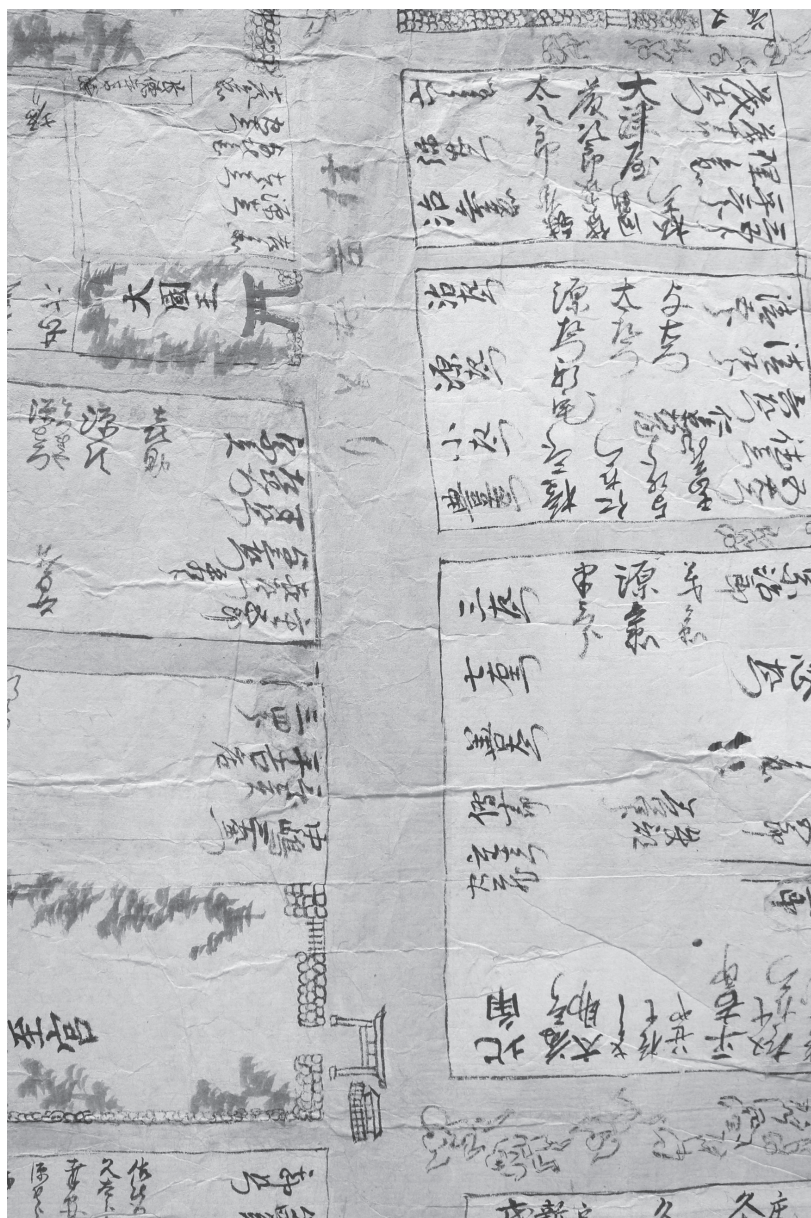


写真3 住吉おとり



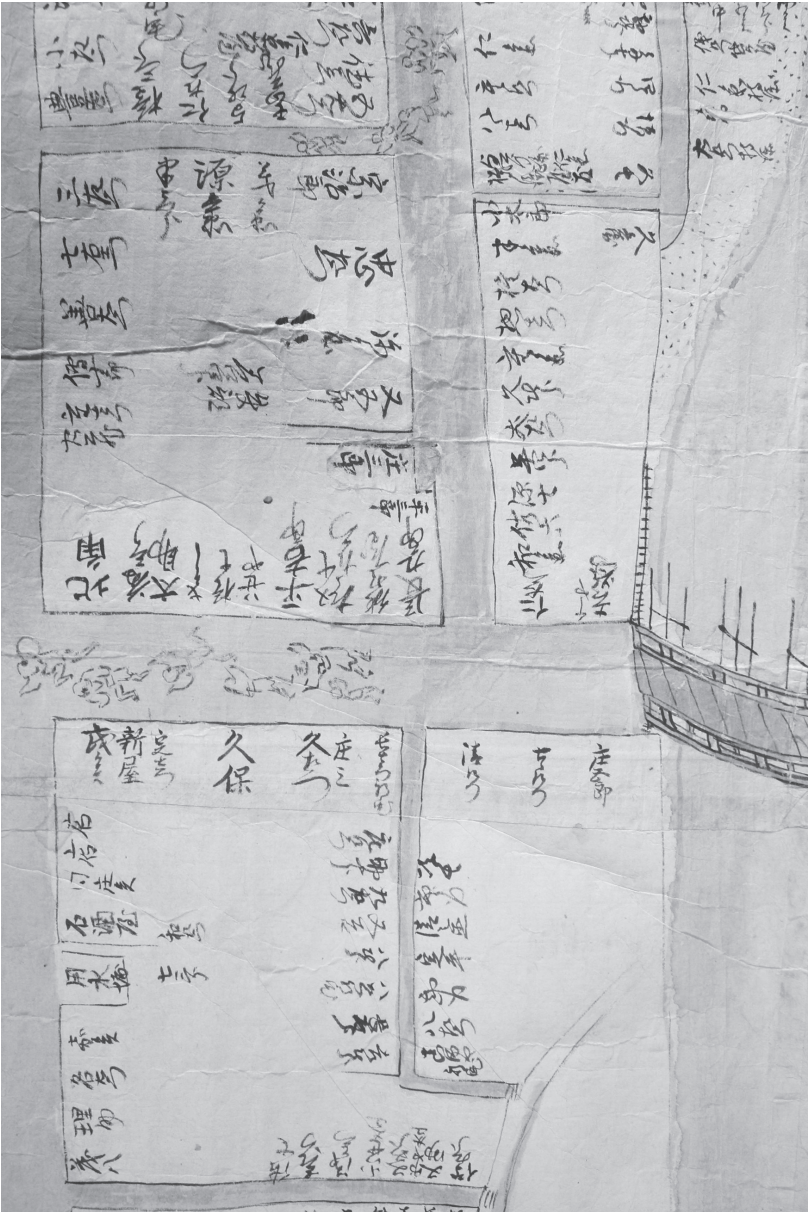


写真4-1 人物6人

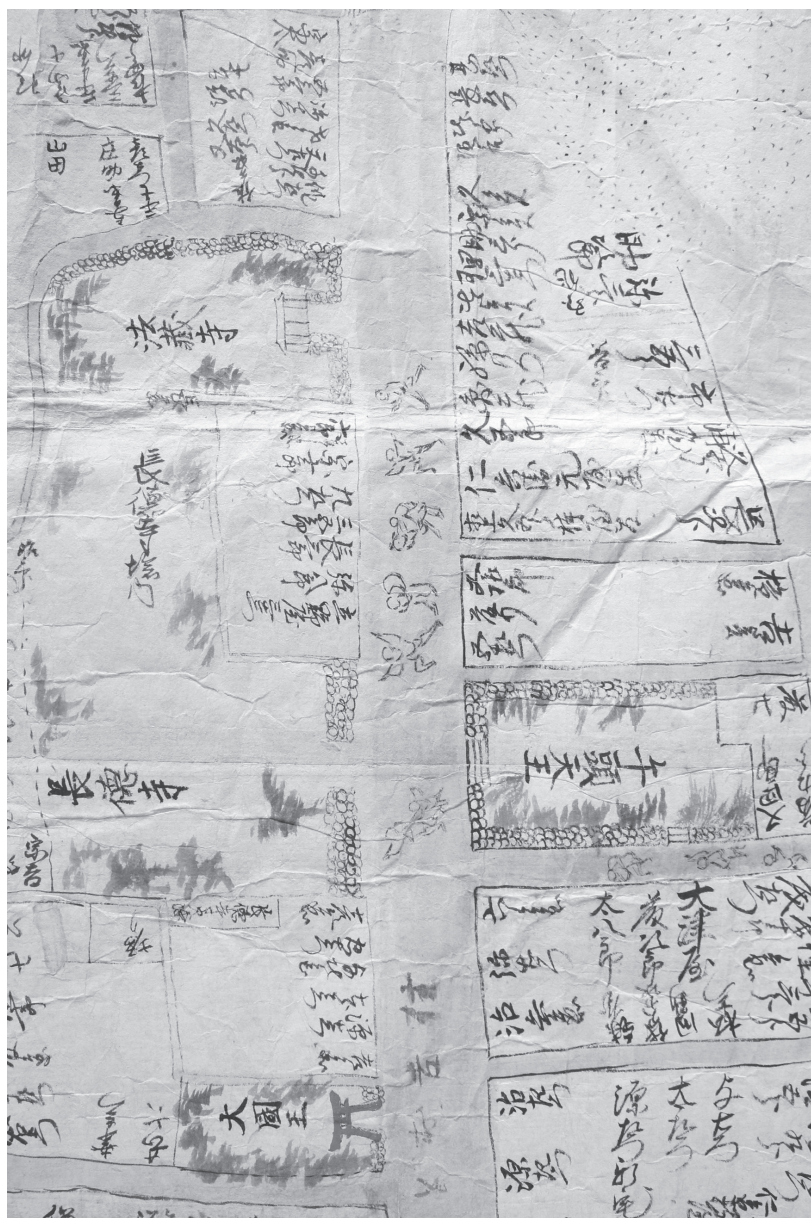


写真4-2 人物2人／人物6人

の姿が描かれていることである。「住吉おとり」(写真三)の文字は「大國主」社の前の通りに、一方人々の姿は何か所かの通りに分かれて描かれている。輪島大橋から「鳳至宮」に向かう通りに六人(写真四―一)、「住吉おとり」と記された通りの「長徳寺」前に二人(写真四―二)、そこから少し離れ「長徳寺」から「法蔵寺」にいたるところに六人(写真四―三)、「牛頭天王」社の裏から横手にかけて六人(写真四―三)、「牛頭天王」社の裏の通りで水路に架けられた橋の南側から小路にかけて五人(写真四―三)、計二十五人の人々の姿が確認される。これらは絵図の描き手とは別人の筆のようにも思われるが、確証はない。それにしても、「住吉おとり」の文字と描き込まれた人々は、何をあらわすものだろうか。

それぞれの人々の集団に即して、少しく詳細に観察してみることにしたい。まず、写真四―一の輪島大橋から「鳳至宮」に向かう通りの六人であるが、鳳至宮側から見て先頭の人物は荷物を背負った男性で、手を伸ばし足を跳ね上げており、急いでいるように見える。二番目の人物も男性で、後を振り返り先頭の人物の呼びかけに反応しているようだ。三番目は男の子、四番目は女の子ではないだろうか。男の子は両手を挙げて駆け

おり、助けを求めているように見える。五番目と六番目の人物は母親と子どもだろう。母親は両手を挙げて何かを叫んでいるように見え、子どもは母親にすがろうとしている。

写真四―二の「長徳寺」前の人物二人も、親子ではないだろうか。これは父親と子どもと思われ、必至に駆け回っている様子が見てとれる。同じく写真四―二の親子の後に続く六人であるが、先頭の男性は両手を挙げ、駆けながら、後の人々に向かって何かを叫んでいるように見える。二番目の人物は荷物を背負った男性、三番目と四番目は子どもを負った母親の姿だろう。五番目の男性は先頭の男性同様、両手を挙げ駆けながら、後の人物に向かって何かを叫んでおり、六番目の男性は皆に追いつこうと懸命に駆け回っているように見える。

写真四―三の「牛頭天王」社の裏手の男性二人は、急いで駆けつけたためではないだろうか、前のめりに倒れてしまっている。同社横手に描かれた男性四人の先頭を行く人物は荷物を背負っており、二番目の人物は手を高く挙げ、三番目の人物に何かを呼びかけているようにも見える。三番目の人物は四番目の人物に、四番目の人物は前のめりに倒れてしまった人物二人に「速く速く」と呼びかけてでもいるのだろうか。



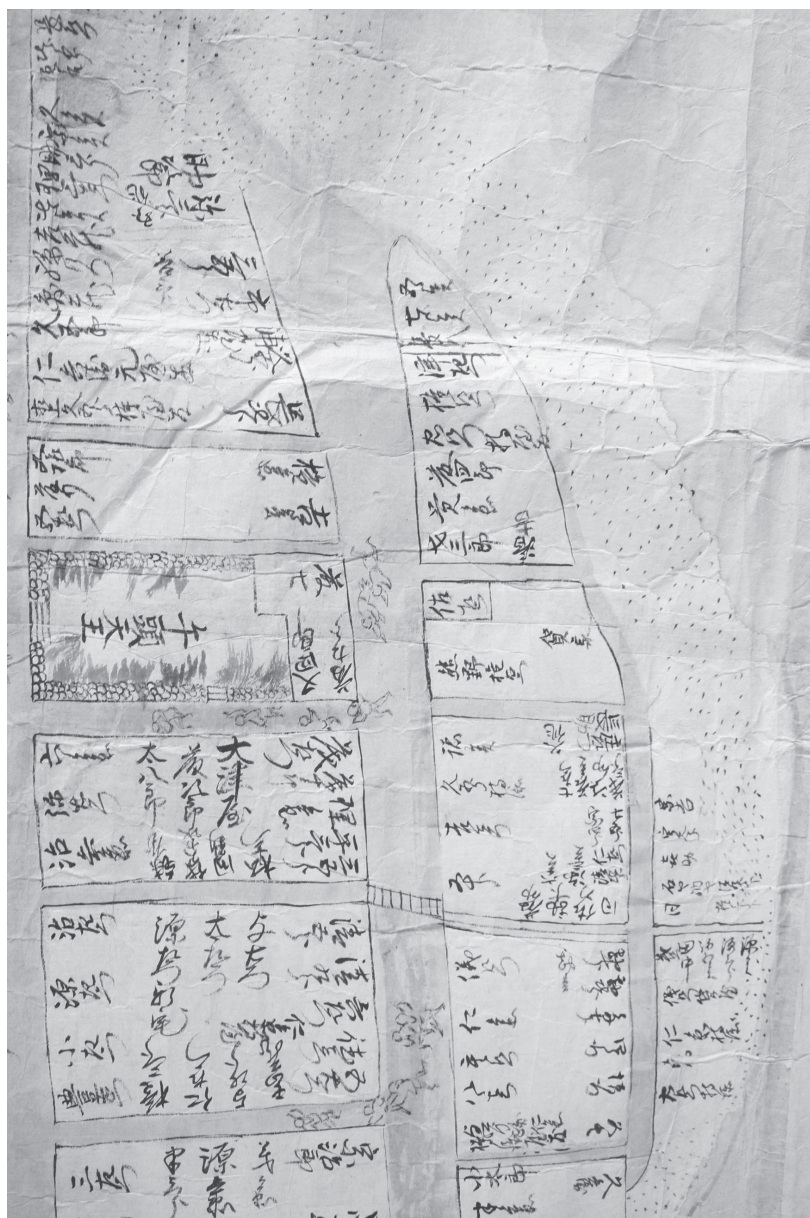


写真4-3 人物6人／人物5人



同じ写真四―三の水路に架けられた橋を渡った辺りの男性五人も、非常にあわてふためいているように見える。先頭の人物は後の人たちに左手を挙げ、何かを叫んでいるように思われる。二番目の人物は三番目の人物に腰の辺りを押されており、「速く速く」と急がされているのではないだろうか。四番目と五番目の二人は、後を振り返っており、「大丈夫か」といったような声を掛けているのもあろうか。

「輪島町絵図」の鳳至町の部分に描かれた人々の姿には、粗いタッチながら、一様に緊迫感のようなものが漂っているように思われる。皆があわてふためいている様子が見てとれる。海から、あるいは川から遠ざかるうとしている様子も窺うことができる。これは、襲いかかってくる津波から、逃げまどう人々の姿を描いたものではないだろうか。そして、その津波は、大変な犠牲をだした天保四年十月二十六日の津波であったと考え、ることには無理があるだろうか。先の図四を改めて見てみると、津波の被害を受けた家々と描かれた人々の位置との間に、対応関係さえ存在するように思われる。もとより、確証はないが、そうした感が払拭し得ない。

それでは、いま一つ「住吉おとり」という文字の書き込みは、

いったい何を意味するのであろうか。よく知られる住吉踊は、摂津の住吉大社の御田植神事に伝わる踊りで、よろず祈願の代行業を職とした願人坊主が諸国で踊り広め有名になったものである。<sup>(4)</sup> 囃子詞をもつ伊勢音頭と混ぜ合わせた軽快な踊りが人気を博したといわれるが、災難封じのために踊られることもあったという。ほかならぬ、絵図に描かれる「鳳至宮」は住吉神社であり、住吉大社の末社にあたる。そうした縁から描き手は、災難封じの願いを込めて「住吉おとり」の文字を記したものであるうか。それにしても、おそらく人々のあわてふためき逃げまどう姿を描き、そのかたわらに「おとり」と記したことに何か屈折したものを感じてしまうが、これ以上の詮索は後日に期したい。

おわりに

従来、「輪島町絵図」の作成時期は、宝暦以降とされるにとどまってきた。しかし、古地震研究会の分析によって、新たに宝暦以降天保四年の地震以前の作という見解が示され、今日まで受け入れられてきた。本稿もまた古地震研究会の成果に多く

のことを学びながら考察を進めてきたが、「輪島町絵図」の作成時期に関しては同研究会と見解が異なり、天保四年の地震以後に描かれたと見るほうがよいのではないかと考える。以下、第三節と多く重複するが、その根拠について記し本稿を終えることにしたい。

根拠の一つは、「輪島町絵図」の河井町の部分が、天保四年の地震によって引き起こされた津波の被害状況を書きとめる「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」に似ているということである。河井町の描画が町の一部に限られ、しかも描かれた地域が海岸近くの一画であること、さらには家の名前や借家の数なども、両絵図はほとんど変わらない。「輪島河合町本町通・浦浜通絵図」から津波被害の文字情報の箇所を除けば、ほぼ「輪島町絵図」の河井町部分になるとさえ言えそうなのである。

二つめは、「輪島町絵図」の鳳至町の部分に記される家の名前と、天保四年「輪嶋鳳至町津波打揚潰家等相調理書上申帳」に記載される津波被害家の名前とを照合したところ、津波被害家の相当数を絵図上に特定できたことである。それらの家々は津波被害の一般的傾向を明確に示し、海辺や川沿いの低地に集中していたことも「輪島町絵図」によって確認することができ

た。

三つめは、古地震研究会でも見逃してきた描画で、鳳至町の部分に描かれた多くの人々の姿と、「住吉おとり」の書き込みである。描かれた人々二五人についての検討結果は、津波から逃げまどう人々の姿と見ることができるといふ推断にいたった。もとより確証などないのであるが、あわてふためきながら海や川から遠ざかろうとしている人々の姿が、粗いタッチのなかから浮かび上がってくるのを振り払えないのである。このようなものと人々の姿を捉えるならば、「住吉おとり」は災難封じを願う書き込まれた文字と理解することも可能となる。

「輪島町絵図」は、天保四年の津波について直接に語ることではない。その絵図を津波以後に描かれたものと理解するならば、はたして絵図作成の目的はどこにあったのだろうか。いま考え得るところは、輪島町の人々の間で、津波で破壊された町の復興もある程度進み落ち着いてきたところ、破壊される以前の町の佇まいを出来る限り復元して遺しておこうとする動きが起き、絵図の作成にいたったのではないだろうかというものである。ただし、「輪島町絵図」は、河井町の部分と鳳至町・海士町・輪島崎村の部分とは明らかに描画のタッチが異なっている。

描き手を異にする二枚の絵図を貼り付け、一枚に仕立てたように見受けられるのである。その意味では、両者間で意志の統一に若干の乱れがあったといってもよいのかも知れない。

それにしても、「輪島町絵図」は明らかに町並図の一種である。そこに全く不釣合な「住吉おとり」の文字と、津波から逃げまどうと見られる人々の姿を、誰が一体どのような想いで描き込んだものか、やはり謎である。これは絵図作成後の新たな描き込みとも思われるが、もはやこれ以上の推測に推測を重ねる愚は終えたほうがよいだろう。津波の記録と記憶に関わる問題として、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 住吉神社文書調査団編『能登輪島住吉神社文書目録』（輪島市教育委員会、一九九二年三月）S一。
- (2) 左古隆「住吉神社文書の概要」（同前書所収）参照。
- (3) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』（石川県輪島市役所、一九七六年二月）参照。
- (4) 図説輪島の歴史編纂専門委員会編『図説輪島の歴史』（輪島市役所、二〇〇三年十一月）参照。
- (5) 「古地震研究会」は、地震学、地質学、地形学、考古学、史学の各専門家の協力の下で、新しい学問分野の古地震研究を開拓するために結成され

た研究会である。萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』（東京大学出版会、一九八九年三月）参照。

(6) 萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』（同前）。

(7) 歴史学研究会編『震災・核災害の時代と歴史学』（青木書店、二〇一二年五月）「刊行にあたって」参照。

(8) 二〇一一年六月二十三日に実施された跡見学園女子大学大学院説明会での、メッセージ文（拙文）を掲載することをお許しいただきたい。

私は一六世紀から一九世紀にかけての日本列島の社会史を研究しています。この時代は、本州・四国・九州では日本国の近世に当たりますが、南西諸島には日本とは別の国家琉球国が、北海道にはアイヌ民族の社会が展開していました。私は、琉球もアイヌ社会も視野に入れたために、あえて「列島社会」という表現を採っています。

この時代の列島社会は、民衆が躍動していました。一四、一五世紀に誕生した新しい村や町は一六世紀以降大いに自治能力を高め、農業・漁業・塩業・林業・薪炭業・鉱山業等の産業の発展は目覚ましく、織物・紙漉・鋳物・陶磁器・酒造などの手工業も多様化し、生産物は商品として列島を駆けめぐりました。陸路はもとより、河川や湖、海は交通路として有機的に結ばれ、商業・金融のネットワークは列島一帯に張りめぐらされています。

遊楽の世界も興行化・華美化を競うようになっています。村の祭礼に人々の行き交いがみられるようになり、町には常設の芝居小屋が立ち、芸能も営業として成り立つようになりました。

私は、このようなかつて送られていた列島社会の暮らしのあり様を学ぶために、各地の村や町を訪ね、海辺や谷合を歩き、あるいは街角に佇み、景観を眺め、人々から話を聞き、そして伝え遺されてきた古文書などの史

資料を読んでみます

ところで、三月十一日、大地震が東日本を揺るがし、大津波が襲い、原発事故が起きました。まるで神話の出来事のような、巨大な惨事を私たちは目の当たりにしました。あれから一〇〇日以上が過ぎました。この間、地震や津波による被害からの復旧は、それなりに進んでいます。しかし、原発事故によって受けた災害からの復旧は、遅々と進んでいません。

この東日本大震災、とりわけ原発事故から学んだことは、人は自然とともに、自然に抱かれ、自然を活かしながら生きるほかないということです。経済成長を下支えする科学技術の発展を「魔法の杖」として、ひた走ってきた日本の近現代史は、三月十一日で終焉したと私は考えています。

日本列島は自然の変化に富んでいます。日本海・オホーツク海・太平洋・瀬戸内海・東シナ海によって四囲をとりまかれる北海道島・本州島・四国島・九州島・沖縄島をはじめとする大小たくさん島の島々、それらの島々は豊かな森におおわれ、森から流れ出る流水は河川となり、谷を削り、平野を開き、やがて海へと注ぎ、海の豊かさを育んでいます。人々は変化に富む列島の自然、四季の移ろいのなかで、自然と共に、自然を活かし、豊かな「生活文化の体系」を築き上げてきました。しかし現在、経済成長を第一義的な目的として掲げ歩んできた日本の近現代の歴史の蔭で、そのような暮らしのあり様はほぼ壊滅状態に追い込まれているのが実情でしょう。

一九世紀半ばの開国後、来日した欧米人の日本見聞記に驚かされます。「日本は天恵をうけた国だ」「地上のパラダイスだ」と言ったのはロシアの商人リュードルフ、「日本人は地球上でも最も幸福な民族の一つである」と言ったのはアメリカの天文学者パーシヴァル・ローエルでした。ただその一方で、自然と敵対する欧米流の文明が日本を「見殺し」にするだろう

とも、当の欧米人たちは予想していました。この予想が現実のものになったことは、日本の近現代史を振り返れば明らかです。しかし、自然との交渉のもとで人々が築き上げてきた生活文化の体系を、この日本列島から消滅させてしまうことに心が痛みます。その一欠片といえど、あまりにもかけがえのないものと思われまう。

「自然と人との共生」、このテーマをめぐることは、近代以前の民衆の暮らしのなかに溢れんばかりの知恵がつまっています。過去のものになりつつある生活文化の学びのなから、未来をこの手に掴み取ることができるかも知れません。

幸いなことに、わが国では一七世紀に入ると普通の人々の手になる古文書などの歴史資料が膨大に遺ってきます。しかも、日本全国どこへいっても、そうした史資料は必ずあります。そこがたとえ離島の村であっても、あるいは山深い谷合の村であっても。なぜなら、どんなところでも人々は懸命に生きてきたからです。

旅が好きで、海や山・川・湖、田や畑が好きで、市場の喧噪が好きで、祭りや宴が好きで、そして調べることが好きな人、大学院で一緒に研究してみませんか。過去に学び、今を考え、未来を伐り開くために。

(9) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』(前掲註(3))第四章、参照。

(10) 太田頼資「能登名跡志」(石川県図書館協会、一九七〇年九月)参照。

(11) 拙著『海と山の近世史』(吉川弘文館、二〇一〇年二月)第一部第二章、参照。

(12) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』(前掲註(3))第四章、参照。

(13) 図説輪島の歴史編纂専門委員会編『図説輪島の歴史』(前掲註(4))

近世29能登一番の輪島大橋、参照。

(14) 萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』(前掲註(5))第Ⅱ部第九章、

津波資料として読み解く「輪島町絵図」―津波の記録と記憶をめぐって―

参照。

(15) 同前書、第Ⅲ部五に収載される新史料〔6〕文久三年、輪島惣略絵図、  
によって確認される。

(16) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』(前掲註(3))第四章、による。  
ただし天保四年の家数は、萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』(前掲  
註(5))第Ⅲ部五新史料〔1〕、による。

(17) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』(前掲註(3))第四章、参照。

(18) 同前書、第四章、による。ただし天保四年の家数は、住吉神社文書調査  
団編『能登輪島住吉神社文書目録』(前掲註(1))G九六、天保四年十月、  
輪嶋鳳至町津波打揚潰家等相調理書上申帳、による。

(19) 萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』(前掲註(5))第Ⅲ部五新史料  
〔1〕、による。

(20) 住吉神社文書調査団編『能登輪島住吉神社文書目録』(前掲註(1))M  
一〇。

(21) 同前書、D二二四、享保二年輪嶋両町持海出入書付返答其外覚書一卷扣  
参照。

(22) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』(前掲註(3))第四章、参照。

(23) 跡見学園女子大学史料調査研究会編『石川県輪島市鳳至久保屋文書目録』  
(輪島市教育委員会、二〇〇五年三月)一一五一、万延二年正月、他国出等  
御口銭帳、からは海士の廻船によって「家具・櫃」をはじめとする様々な商  
品が、輪嶋湊から他国へと移出されていたことがわかる。

(24) 輪島市史編纂専門委員会編『輪島市史』(前掲註(3))第四章。中村裕  
編『親の湊の光茫 輪島港ものがたり』(輪島市教育委員会、二〇〇〇年七  
月)参照。

(25) 萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』(前掲註(5))第Ⅱ部第九章、

第Ⅲ部五、参照。

(26) 住吉神社文書調査団編『能登輪島住吉神社文書目録』(前掲註(1))G  
一八、巳(天保四年)十二月、覚。

(27) 同前書、G一九、巳(天保四年)十二月、(大沢村義左衛門達書)。

(28) 同右、G九六、天保四年十月、輪嶋鳳至町津波打揚潰家等相調理書上申帳。

(29) 同右、G九五、巳(天保四年)十月、溺死人。

(30) 同右、G一〇一、(天保四年カ、溺死人之内未タ見当リ不申分)。

(31) 同右、G一一二、(天保四年十二月)、覚。

(32) ここで七日を十二月の七日と判断したのは、前掲註(27)十二月八日付  
の文書中に、「[当]月七日輪嶋鳳至町頭振故佐右衛門祖母なつ死骸、同所領  
渚江流寄候」という文言が見出されることによる。

(33) 住吉神社文書調査団編『能登輪島住吉神社文書目録』(前掲註(1))G  
一六、天保四年十一月、(みな死骸葬方願書)。

(34) 北原糸子「災害にみる救援の歴史―災害社会史の可能性」(歴史学研究  
会編『震災・核災害の時代と歴史学』(前掲註(7))参照)。

(35) 住吉神社文書調査団編『能登輪島住吉神社文書目録』(前掲註(1))G  
九四、天保四年十月、津波二付見舞覚。

(36) 同前書、G一一五八、天保四年十一月、当十月廿六日昼八つ時頃地震引  
続津波打揚家財物置共皆潰流失仕及難義候者共江為施与銭指出人々江相渡  
申帳。

(37) 同右、G一一一、巳(天保四年)十一月、(極難洪者共施行覚)。

(38) 同右、G九八、天保四年十月、洪波御貸米人々貸附根帳。

(39) 同右、G九九、天保四年十月、天保四年巳十月津波打揚申二付右諸人用  
入払帳。

(40) 同右、S六、(天保四年)、輪島河合町木町通・浦浜通絵図。

(41) 萩原尊禮編著『続古地震―実像と虚像』(前掲註(5)) 第Ⅱ部第九章、参照。

(42) 同前書、第Ⅱ部第九章、参照。

(43) 住吉神社文書調査団編『能登輪島住吉神社文書目録』(前掲註(1)) G  
一〇三、已(天保四年)十一月、覚。

(44) 長谷川嘉和「住吉踊」(小島美子他監修『祭・芸能・行事大辞典』(上)、朝倉書店、二〇〇九年十一月) 参照。

#### 附記

本稿の作成にあたっては、住吉神社宮司浅井則家氏、砂上正夫氏、輪島市教育委員会浦倫啓氏に大変お世話になりました。記して感謝の意を表します。

また、本稿は「平成24年度跡見学園留学助成費」による「日本近世海域社会の研究」の中間報告である。